



CONTENTS

「HIV/AIDSから見える、病気と向き合う社会」.....	01
第29回日本エイズ学会学術集会@東京 感想文.....	02
研究成果発表会「HIV陽性者とメンタルヘルス」.....	04
「TOKYO AIDS WEEKS 2015」開催！.....	05
東京性教育研修セミナー「学校でのLGBTへの新たなとりくみ？」...	06
ぷれいすトークSpecial「マイナンバー制度と個人情報」....	08
ネスト・プログラム.....	09
部門報告(2015年10～12月).....	13
サポーター 200人募集中！.....	16

「HIV/AIDSから見える、病気と向き合う社会」

根岸 昌功(ねぎし内科診療所)

AIDSが報告され、33年が経過しました。この感染症が社会に与えた衝撃と対応を一臨床医の立場から整理してみました。

日本では、明治10年から、急性伝染病者を隔離することで、国民を守る政策をとり、明治40年には、癩という慢性感染症に対する隔離政策が定められました。この法が施行されている1981年に、AIDSが登場しました。発病者らが社会的排斥を受ける中、翌年には米国で救済活動が起き、J.Mannは後に「この病気とどう闘い、どう付き合うかの有力なサンプルを与えてくれた」と発言しています。その後約2年の調査・研究で、この病気の分布、リスクが理解され、病原体分離から抗体検査法ができ、抗体陽性でも発病していない者が多数確認され、この感染症は慢性・進行性の病気、AIDSは末期の病態であると理解されていきました。

日本では1986年からの『エイズパニック』を経て、AIDSに関する立法を目指し、臨床の場に行政の介入権を設定しました。この動きに対し、疫学、行政、臨床、法曹の立場から、およびハンセン病患者からの意見表明もありましたが、1989年に「後天性免疫不全症候群の予防に関する法律」は成立しました。

米国では1990年に全米障害者法が成立しました。WHOの国際障害分類β版の理念がその背景にあります。同じ障害があっても、その人の背景因子の違いによって、社会参加のありかたが左右されることに注目し、環境因子を改善する方向性を示し、のちに国際生活機能分類へと進展しています。1992年にJ.Mannが米国の感染者入国規制政策に反対し、第12回国際エイズ会議開催地をボストンからアムステルダムに変更しました。一方1993年、早くも薬剤耐性HIVの報告がありました。

1994年ぷれいす東京が発足。第10回国際エイズ会議、第一回AIDS文化フォーラムが横浜で開かれました。1996年、薬害HIV訴訟の和解が成立し、恒久対策の具体化検討が始まりました。1997年、東京都の「外来診療のあり方に関する研究」報告書があり、クリニック構想の原点になりました。1998年にHIV感染者の身体障害者認定制度が始まりました。HIV感染症を内部障害とし、環境因

子の改善を図り、治療を受けながらの社会参加を支えるという新しい理念は、感染者のHIV治療へのアクセスに大きな良い影響を与えましたが、HIV感染者の社会参加は、険しいままであるのが現状です。この年、いわゆる「エイズ予防法」「らい予防法」「性病予防法」がようやく廃止され、「感染症の予防及び感染症の患者の治療に関する法律」に改正されましたが、2000年にはハンセン病患者への宿泊拒否が起きました。

1998年に、飛行機事故でJ.Mann夫妻を失いました。彼は、エイズ対策プログラム制作にHIV感染者が参加する権利を擁護する闘いをしてきました。

WTOのTRIPS協定と『ドーハ宣言』は守られず、1998年から抗HIV剤の知的所有権・財産権と「治療へのアクセス」とのトラブルや訴訟が相次いで起き、より多くの感染者へジェネリック薬での治療を提供しようと、10年以上もがいているのが国際的状況です。

2004年に、HIVクリニック構想がまとまり、開設地を探しました。HIV感染症を扱うと説明すると、大手不動産紹介業社はほぼ門前払いで、駅前不動産屋が応援してくれ、ねぎし内科診療所は2007年から診療を始めました。

2013年、UNAIDSは知的財産権の新たな枠組みを提言し、「2030年のエイズ終結に向けて」を発表し、2020年までに、HIV感染者の90%が感染を知り、90%が治療にアクセスし、90%が十分にHIVを押さえ込む必要があると指摘しています。一方、米国CDCの公式サイトは、2013年末の米国内HIV感染者推定数は120万人で、うち86%は感染を知り、うち82%が3か月以内に治療開始しているが、治療継続は39%、HIVの抑制成功は30%という現状を報告しています。第20回国際エイズ会議のメルボルン宣言は、「依然として流行の主要因になっている犯罪視や偏見、差別などの障壁を克服できなければ、エイズの終わりは実現しない」と結んでいます。

感染者を「治療を必要としている人」と位置付けられるのか、抗HIV剤の知的財産権問題が解決して「治療へのアクセス」が保障されるか、現在もこのふたつは大きな課題です。

第29回日本エイズ学会学術集会 @東京 感想文

2015年11月30日(月)、12月1日(火)に第29回日本エイズ学会学術集会が東京都文京区で開催され、ぶれいす東京からも演題発表、シンポジストや座長など、さまざまなかたちで参加・報告がありました。ぶれいす東京にゆかりの深い6名からの感想文をお届けします。

「予防と呼ぼう」 福原 寿弥

第29回日本エイズ学会学術集会が、「予防、予防、予防そして予防」という、ちょっと意表をつくテーマのもと、東京で開催されました。

参加した幾つかのセッションのうち、まずPlenary Lectureでは、T as P (Treatment as Prevention) すなわち、治療によりウイルス量を押しさえ込んでいけば、周囲への感染の広がりを防げるとする最新の知見が示され、またPrEP (Pre-Exposure Prophylaxis) すなわち、感染前の人があらかじめ抗HIV薬を使って予防するという、海外での研究報告がありました。こうした予防法がいよいよ現実味を帯びてきていますが、まだ問題は残っており、例えば感染直後で特に症状がなく、しかし血中ウイルス量が急上昇している時に、うまく治療を開始できるのかとか、感染していない人が毎日薬を飲み続け、耐性を誘導したり、副作用で健康を害さないか、そして、高いお薬の費用をどうするのか等々。WHOの予防ガイドラインでも、コンドームの使用促進が前提とされていますが、今学会が、我が国におけるこういった流れを考える契機となったことは確かでしょう。

恒例の「治療の手引き」のトピックは、初回推奨のキードラッグのうち、インテグラーゼ阻害剤の存在感が増したこと。しかもそのうちドルテグラビルの使用頻度が高いと、一般演題でも報告されていました。ただし、日本での使用期間は短く、海外と比べ副作用の発生頻度が若干高いのではないかと、特に下痢、頭痛、不眠など、検査では把握しにくい症状に注意を要するのでは…、とのことでした。

ぶれいすでの活動を通して、陽性者の今を感じる機会を与えられているにもかかわらず、ここ最近の様々な変化に追いつけてない感じがします。以前と比べて改善した点、変わらない点、むしろ後退した点…。より良い方向へ、少しずつでも進んでいけるよう願います。

「PrEP」「郵送検査」と「予防・支援」 市川 誠一

(人間環境大学・看護学部)

例年の3日間より1日短い日程とのことだったが、総会前に2日間のイベント、シンポジウム・市民公開講座、総会最終日も午後7時半までのワークショップと、終わってみたら4日間の学会参加であった。イベントは、ACCホールでのコーラス・写真展、そして「血液製剤によるHIV陽性者に聞く……」、エイズ予防指針の個別施策層シンポジウムと興味深い企画だった。「在日外国人」シンポでは、南米系在日の人たちに予防啓発と支援活動をしているNGOが、長年取り組んできた活動から「予防啓発」を中断せざるを得なくなったと発表した。以前から、「在日外国人」に取り組むNGO活動への財政支援の脆弱性が気になっていた。学会は「予防」を軸としたテーマであるが、個別施策層への「予防啓発」を担っているNGOがその活動を維持できないわが国の現状と課題を、このNGOの苦渋の

決断は示している。

今回の学会は、「PrEP」や「郵送検査」といった新たな段階を予感させる内容であった。1997年のHIV感染症疫学研究班報告書によれば、AIDS診断4年後の生存率は5%。HAART導入はこれを大きく変え、今では1日1錠、そして予防プログラム「PrEP」が勧奨されるまでになった。一方、これまでの間、NGOはSafer Sex、セクシュアル・ヘルス、ハーム・リダクション、Living Together、検査で陽性と分かった人たちへの支援と様々な取り組みを開発し、偏見・差別の無い社会づくりに貢献した。HIV感染のリスクを抱える人や感染した人に軸をおいたこれらの取り組みは、これからも重要な主軸としていかねばならない。



市川誠一氏

「日本エイズ学会と私にとってのスカラシップ制度」 Y

1981年、初のAIDS症例報告から約30年、薬害AIDSの方々が「感染経路の如何に関わらず、身障者制度の適用を…」と一筆され、その後の2006年から回を重ねた日本エイズ学会の歴史の上に、私も参加することが出来た昨年開催の大阪、および本年開催の東京の2回がありました。

今回のワークショップ「HIV陽性者の日本エイズ学会への参加」では、学会とスカラシップ制度のこれまでの歴史を振り返ることができ、その中で当事者と研究者の、「ともに学びあい、支えあう。」という考え方、セルフマネジメントの構築と「助けてもらうだけでなく、自分も助ける側に転ずる。」という心持ちに変えてゆくこと、予防と一言で表すのではなく、「発症予防」・「予後(悪化)予防」など、諸々の側面から考えてゆくべきである、といった内容を、改めて俯瞰することが出来るようになった。上記に加えてこの疾患と付随する生活に於いて、とりわけ「今後のライフプランの構築」といった、興味深い内容に触れることができ、とても有用な時間を過ごすことが出来たと感じています。

慢性疾患と位置づけられるようになった昨今ではありますが、私のように複合した障害を持ち合わせ、普段から車椅子生活で行動の制限がある者としては、会場までの移動で、ちょっとした道端の段差も含めた世の中の事や人様の温かみに触れ、会場では当該疾患患者との交わりを得て互いを確認し、そしてまだ見ぬ仲間や自身の未来の設計を含めた予測をする機会としても、このスカラシップ制度は有用であると考えました。

これも偏に関係省庁や医療従事者の方をはじめ、疾患に関しての啓蒙活動や当事者に対するサポートで導いて下さる方々などの、先達の倦まず弛まずの活動のお蔭だと感謝しています。

「HIV治療を支える社会保障制度

～その必要性と歴史の重み～ はんきー

政策に関するあるセッションに参加しました。地方の若い看護師さんから、あるHIV陽性者が自立支援医療の利用を拒み、高額な医療費のため治療を断念したこと、HIV陽性者に対する医療費の補助などの社会保障制度が癌などの他の疾患に比べて恵まれすぎていて、日本の健康保険財政を圧迫することになるので見直されるべきだなどの発表がありました。

思わず当事者として発言。現状認識が誤っていることを指摘しました。確かにHIV治療は高額ですが、患者数は日本全国で25,000人程度に過ぎず保険財政に影響を与えるほどではなく、むしろ費用の心配いらずに医療にアクセスできるため結果的にHIV感染拡大を防止している可能性もあります。

また、薬害によって感染したHIV陽性者は制度が維持されるべきだが、性感染に関しては予防可能な病気であるので医療費助成を見直すべきであるとの考察もありました。これに関しては座長から、同じ病気であっても罹患した原因によって医療費助成の対象とすらかどうかを区別するという考え方に対する懸念が述べられました。

しかし、この看護師さんの感想が世間的には異常とは言えない実情があります。例えば、通院で抗がん剤治療をする人が、高額療養費という制度を利用すれば一定額以上は申請すれば還付されますが、それでも多くの人は月に9万円近くの自己負担となり、来年からはより負担が増えます。そのため治療をためらったりする方も癌以外の疾患でも多いのが実態です。

そういった現場をよくご存知の方がHIVの医療費補助について疑問を持たれるのも理解できます。HIV陽性者に対する社会保障制度、医療体制は薬害エイズ訴訟の和解の結果であり、被害者の方たちが「感染経路を問わない」ことを主張してくれた結果のものであります。当たり前にあるものではないことを改めて認識し、現在の制度の必要性や支援のあり方、日本の「エイズ」の歴史を当事者自身が発信していくことの重要性を改めて実感しました。

「いつか誰かの力になろうという思い」 佐藤 郁夫

(ネスト・プログラム・コーディネーター)

「陽性者支援」のセッションで「ネスト・プログラムの運営に陽性者が関わること」について発表した。ぶれいす東京では以前、陽性者のボランティアスタッフを「新陽性者PGM」のみに制限していたが、2012年からプログラムの運営をより安定させるために広く募集をした。その結果、年間のプログラム開催数は、80回から120回に増加。参加者は737人から1,275人とそれ以上に増加が見られた。またこのネスト・プログラムのボランティアスタッフのうち約6割が陽性者だった。

同じセッションで、新潟県と石川県から陽性者同士の集まりに関する発表もあった。新潟の「らっくら」は、立ち上げのときにぶれいす東京の研修「地域における当事者のためのプログラム・スタディ・ツアー」に主催のMSWが参加し、初開催の時にぶれいす東京がスタッフを派遣してお手伝いしたグループだ。

地方では「他の陽性者に会いたい」という気持ちがあっても、始めて参加するときは「知り合いに会うかもしれない」



演題発表をする佐藤

などプライバシーへの不安が東京以上に大きいのではないかと感じた。元々陽性者数が比較的少ない地域のため参加人数が少ないことや、地元の陽性者に十分な情報が届きにくいこと、県単位で考えると交通の便が悪く参加地域に偏りがあることなど、東京とは異なる事情がいろいろあるように思う。

僕がぶれいす東京のボランティアになった頃、自分の将来像として憧れたのは、エイズ学会やグループミーティングで活躍している陽性者の姿だった。Futures Japanの調査で、HIV感染によるマイナスイメージの転換期は、陽性になってからおよそ3年という数字が出た。プログラムに参加している陽性者の、いつか誰かの力になろうという思いが、参加の継続や、運営にたずさわるモチベーションに繋がっていると思う。

ここ数年、各地で陽性者の交流会やサポートグループが立ち上がった。プライバシーの課題があるにせよ、地元で陽性者に会えることは大きなメリットがある。継続して開催していけば、その地域で核となる陽性者が出てくると思う。その輪が広がり、各地域での陽性者の生きる力になったらいいなあと思っている。

「メモリアルサービス『生命をつなぐ』に参加して」

神谷 昌枝(東京都エイズ専門相談員)

今回の学会で、メモリアルサービスに参加し、スピーチをさせていただく機会を得た。パートナーを亡くされた方、担当患者様を亡くされた方、血友病の同胞の方たちを亡くされた方のお話をお聞きし、また、陽性者の方の讃美歌のような優しい歌声をお聞きする中で、私の中で一つの思いが強くなった。それは、「今ここにいらっしやらない大切な人」との別れからたとえ何年過ぎようと、大切な人は確実に私たちの中に存在して、息づき、私たちを通して、「語って」くれているということである。

私は、ご本人に了解をいただき、息子さんを亡くされたお母様のお話をさせていただいた。その方は、数年前に経験された絶望感をいまだに強くお持ちになっているが、「私の眼を通して、息子に色々なものを見て、色々なものを感じてほしいし、私の口を通して、彼の大切にしていたことを伝えていきたい。私の中で、彼は確実に生きている。私は彼の母親になれて本当に幸せだったし、生まれ変わっても彼の母親になりたい」と語り、息子さんの「存在」が少しずつ、前に進む力となっている。

このメモリアルサービスに参加し、今を生きる陽性者の方々のみならず、実は、私たちの中に存在している、「今ここにいらっしやらない大切な人」たちもまた、パートナーや同胞、医療関係者、家族などを通し、「生命をつなぐ」大切な力になっていると感じた瞬間であった。

「予防、予防、予防、そして予防」を目指す一方で、様々な「生きづらさ」を理解し支援を広げていこうとしている現状を知る中で、その背景にある「力」を強く意識した学会であった。

研究成果発表会

「HIV陽性者とメンタルヘルス～薬物使用は生き辛さの現れか？」

11月29日に国立国際医療研究開発センターにて、第29回日本エイズ学会プレイベントの一環として研究成果発表会が開催され、154人が参加しました。

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業「地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究(代表：樽井正義)」/
主催：公益財団法人エイズ予防財団／共催：第29回日本エイズ学会学術集会・総会

本研究発表会はぶれいす東京の研究グループに参加している研究者に加えて、HIV Futures Japanプロジェクトの井上洋士さんにもご登壇いただいた。



左から肥田氏、井上氏、若林氏

まず、生島からは、ぶれいす東京に寄せられる相談、特に対面相談に薬物使用者からの継続相談のニーズが多数寄せられている実情を報告した。

続く若林氏からは、エイズ治療拠点病院外来受診者の5年に一度の調査結果から、治療技術の進歩による療養生活の大きな改善がある一方、K6といううつ病・不安障害に対するスクリーニングテストを用いた結果では、メンタル状態のネガティブな影響が長期に及ぶことが報告された。

井上氏からは、ストレス対処能力(SOC)の低さと薬物使用の関連が強く示唆され、生きづらさを乗り越えるための手段として利用されている可能性が指摘された。さらに、SOCの低さはLGBTやHIVのスティグマの影響により十分に高める機会を逸しているのではという指摘もあった。

また、肥田氏からは、依存を専門とする精神科クリニックにおけるLGBTを対象とした12ステップを基本とした自助グループの取り組み、HIV陽性者の診療記録からの分析の途中経過が報告され、回復にむけてクリニックがどう機能しているかが報告された。

陽性者を対象とした二つの調査、相談の現場、専門医療機関といった、異なる立ち位置からのそれぞれの報告で、薬物使用の背景にあるメンタルや社会環境に起因した生き辛さといった重要な課題が、より具体的に浮かび上がる研究成果発表会であった。(生島)

演者

生島 嗣(ぶれいす東京 代表)

「HIV陽性者や周囲の人から寄せられる相談内容と薬物使用」

若林 チヒロ(埼玉県立大学保健医療福祉学部 准教授)

「HIV陽性者の健康と生活調査からの報告～療養と社会生活」

井上 洋士(放送大学 教授)

「Futures Japan 調査での薬物使用と心の健康と『生きる力』」

肥田 明日香(アパクリニック 副院長)

「薬物依存症クリニックの受診者と治療実践」

座長

樽井 正義(ぶれいす東京 理事／慶應義塾大学 名誉教授)

生島 嗣(ぶれいす東京 代表)

アンケートより▶▶▶

参加者は、HIV陽性者、NGOメンバー、看護師がもっとも多く、次いで、薬剤師、医師、MSW、保健師、自治体職員、研究者、学生など多様な参加者がいたことがわかる。

「薬物使用は心理的・社会的・保健的な問題であり、支援が重要であることを改めて考えました」(30代／看護師)

「なんとなく自分の持っていた感覚と、Mass Dataから見た結果が同じだと感じた」(40代／NGOメンバー・HIV陽性当事者)

「社会の中での生き辛さからくるドラッグへの依存率、HIV陽性者の精神的苦悩の負の連鎖があることを実感した。行動の始まりに意味があり、またそれを周囲が受け止め、問題行動であればそれを回避できるようサポートが必要である事の重要性を理解した」(40代／HIV検査業務従事者：臨床検査技師)

参加者より▶▶▶

「もし薬物に出会わなかったら…」 T

(45歳／男性／感染告知年2008年／服薬歴6年)

登壇された先生がたから「覚醒剤依存の患者さんの多くにHIVの治療をしている人がいる」「性的少数者であることに加えHIVを持っていることのスティグマが負担になって薬物使用にむかう人もいる」「依存症の人の多くは自尊心が低い」などの話が聞かれました。当事者としては、そうだよな！と納得することしきり。

僕自身も、幼年期にゲイだと気づき、大事なことは親やきょうだい・親友にも相談しないのが普通。自分は欠陥品だから、本心を隠して世間用の顔をがんばって作るのが当たり前という生活を20年近く続けてきました。うつ病が発症し仕事が出来なくなったときに、たまたま覚醒剤と出会い、辛いときの切り札のように使い続け、自分を大事にすることができずHIVにも感染、でもどうにかこうにか生きながらえてきた…というのが正直なところ。もし薬物を使っていなかったら、いま命があるかどうか自信もありません。

逮捕や体と精神の底付きから治療環境につながって、ようやく生きた心地がしています。親に理解があったら、友達に恵まれていたら、もっとがんばっていたら、薬を使わなくて済んだのかもしれない。だけど、僕にはこの人生しか生きられなかった。そして、同じように薬を使って生きのびてきたけれど、もう上手く使えなくなった人が他にもいると、シンポジウムのなかで数字が教えてくれました。

薬を使うことは罪で、依存者は快楽に溺れる弱い者だ…と、僕たち依存者の多くは、自分を恥ずかしく思っています。このシンポジウムを聞いて、薬物依存という病気を持つひとは、治療というケアを受けていいんだという考えを、また少し受け入れることができました。



「TOKYO AIDS WEEKS 2015」開催！

UPDATE YOUR REALITY

～ HIV/エイズをめぐる現実はそのすごいスピードで変化している～

「TOKYO AIDS WEEKS 2015を終えて」 生島 嗣

(ぶれいす東京)

12月1日の世界エイズデーの前後の期間(2015年11月21日～12月12日)に、「TOKYO AIDS WEEKS 2015」を開催しました。昨年大阪で開催された同様の取り組みに続き、東京でもスタートしました。きっかけは、第29回日本エイズ学会学術集会・総会の岡会長から社会系プログラム部門長であった生島に、「学術集会のイベントとして11月28日～29日に国立国際医療研究センターを会場に、プログラムを編成してくれませんか！」との提案を受けたことです。HIV/エイズ系のNPOや研究機関、行政、第29回エイズ学会と連携しつつ、2日間にわたるイベントを中心に企画し、3週間の期間中に多様なイベントが開催されました。

このイベントでは、市民のHIV/エイズへの理解を深めてもらい、HIV陽性者およびHIV/エイズに対する偏見差別を解消し、感染予防や検査が受けやすく、感染した人々も安心して暮らせる社会づくりを目指しました。プログラムの立案は参加/協力NPO、行政に依頼しました。また、自主企画では、コミュニティで活動する隣接団体に参加をよびかけました。パープル・ハンズ、ナルコティクス アノニマス(NA)、複数のゲイの合唱団、東京国際レズビアン&ゲイ映画祭、グッド・エイジング・エールズ、東京レインボープライド、シェア=国際保健協力市民の会、CHARM、SWASHのメンバーなどです。

また、はばたき福祉事業団の提案で「HIV/エイズ スタディー・バスツアー」を敢行しました。新宿区長、区議会議員、第29回日本エイズ学会長、保健所スタッフ、NGOスタッフがバスに同乗し、新宿区保健所HIV検査所、新宿2丁目コミュニティセンターakta、国立国際医療研究センターをまわりました。このビデオは、学会会場やweb上に公開しています。

2日間のイベントには、合計1,000人以上が来場し、コミュニティ・フォーラムのようにぎわいを見せました。期間内のイベントにも多くの参加があったと聞きました。

このキャンペーンは、第29回日本エイズ学会学術集会(会長：岡慎一)、手弁当でプログラムの企画運営に参加していただいた地域のグループ、NPOや行政、研究機関、そして、イベントを陰で支えてくれた多くのボランティアたちの協働があり誕生しました。今後、なんらかの形で継続できたらうれしく思います。

「上を向いて歩こう」 加藤 力也(ぶれいす東京)

「エイズ学会のイベントでゲイ・コーラスを」開催までは紆余曲折がありました。一度決まった指揮者の交代、それに伴う選曲のやり直し、参加者集めの苦勞、本番間近になっての譜面カバー作成、ピアノ調律手配…。国立国際医療研究センターという場所での音楽イベントなど、初めての経験です。どんなステージが出来上がるか当日になってみないと分からないという、正に手探りの状態でした。

結果的に30人程の参加者が集まり、合唱初心者もいる中、新たに指揮をお願いしたなおきさんの的確な指導や、メンバーが作成してくれた音取り音源のお陰でみんな安心して本番に臨めたようです。

心配していた集客についても蓋を開けてみれば大盛況。途中挟み込まれた長谷川さんの詩の朗読では涙する姿も見受けられました。アンコールの『上を向いて歩こう』を会場のお客さんと一緒に歌いながら、想像以上に温かいステージが実現出来たことを心から嬉しく思いました。

良かったよ、と言って下さる多くの方々の声を聞き、歌の持つ力を改めて感じました。上を向いて歩く勇気をもたらしたのは、こちらの方でした。参加者やご尽力下さったたくさんの方々に、本当にありがとうございました。



感動のコーラス！

国立国際医療研究センターの吹き抜けロビーにて



レスリー・キー写真展「OUT IN JAPAN」
LGBTであることやHIV陽性であることをカミングアウトする写真やメッセージも

「TOKYO AIDS WEEK 2015での出会い」 リュウ (40代/男性/ゲイ/陰性パートナー)

6年間、陰性パートナーとしてHIV/AIDSと接してきました。そんな中、パートナーの付き添いとして訪れた病院で「TOKYO AIDS WEEK 2015ボランティア募集」のリーフレットを見つけ、HIV/AIDSとの距離を縮めたいと思っていた私は、ボランティアに参加することにしました。

公共の場でHIV/AIDSと関わるのは初めての経験。最初は緊張しましたが、徐々に慣れていき、ボランティアの合間を縫っていくつかのプログラムを拝聴することもできました。様々な方々がそれぞれの立場でHIV/AIDSと接しており、HIV/AIDSを取り巻く環境は急激に変化していることを知り、自分の視野が少しは広がったかなと感じています。

2日目には素敵なおばあちゃんにも出会いました。入院患者のおばあちゃんが「今日はコーラスはやらないの？昨日ものすごく感動して泣いちゃった。今日も聞きたいなと思って来たの。」と話しかけてきたのです。コーラスは1日目だけであることをお伝えすると「残念。もう一度聞きたかったわ。それと、あそこに飾ってある写真はなに？」とレスリー・キー氏の写真展のことを聞かれたため、LGBTの活動に賛同されている方たちの写真であることをご説明すると、「私はね。いろんな人がいてもいいと思ってるの。応援するわ。頑張ってるね。」と、とても印象深い一言を掛けて頂きました。

長い年月を生きてこられた大先輩からLGBTは認めてもらえた。これからも自分なりのペースでHIV/AIDSと関わっていきたいと感じた2日間でした。

新宿区内の
エイズ対策の現場を
バスでツアー
吉住区長や
議員さんたちと
新宿二丁目のaktaへ



YouTubeにて配信

<https://www.youtube.com/watch?v=eMixHIMKhOw&feature=youtu.be>



お揃いのスタッフTシャツのボランティアのみなさん
中央には車椅子に乗って詩の朗読を披露した長谷川博史氏も

企画・運営団体

TOKYO AIDS WEEKS 2015 実行委員会

NPO法人akta、NPO法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、社会福祉法人はばたき福祉事業団、NPO法人ぶれいす東京、NPO法人エイズ&ソサエティ研究会議、公益財団法人エイズ予防財団、国際基督教大学ジェンダー研究センター、第29回日本エイズ学会学術集会(会長 岡 慎一)

後援：東京都、新宿区、ウィーブヘルスケア株式会社、鳥居薬品株式会社、アッヴィ合同会社

東京性教育研修セミナー

「学校でのLGBTへの新たなとりくみ? ~文部科学省通達をうけて当事者と考える」

11月3日(火・祝)に日本性教育協会にてセミナーが開催され、全国から24名が参加しました。

(主催：ぶれいす東京/協賛：日本児童教育振興財団内 日本性教育協会(JASE))

「東京性教育研修セミナー 報告」 丸井 淑美

11月3日に開催された東京性教育研修セミナーには、三重県、静岡県など全国から教育関係者、医療関係者、現役大学生、NPO関係者、メディア関係者など、当事者を含む24名のみなさまにご参加いただきました。

前半は、お二人の講師をお招きし、若者の立場から、家族の立場から、それぞれの現状や具体的な課題についてお話いただきました。埼玉大学教員の渡辺大輔さんからは、学校教育における「性の多様性」の位置づけや中高生を対象とした授業実践についてご紹介があり、「LGBTの家族と友人をつなぐ会」の小林りょう子さんからは、当事者であるお子さんのカミングアウトのエピソード、学校における心ない対応や未だ社会に存在するLGBTへの偏見や差別の事例等をお話いただきました。

後半のグループワークでは、参加者が4つのグループに分かれて、学校における性的マイノリティを取り巻く課題を挙げ、次にそれぞれの立場で何ができるかについて話し合いました。年齢や背景が異なる初対面の参加者によるグ

ループワークでしたので、ファシリテーターの私としては内心とても緊張していたのですが、そんな心配はどこ吹く風、どの班も時間が足りないと感じるほどの盛り上がりを見せていました。各班からは「当事者の教師がカミングアウト出来ない学校で子どもがカミングアウト出来ないのは当然」「職場に帰ったら一人ずつ仲間を増やしていきたい」などの報告がありました。セミナー全体をとおして、いろいろな職種や立場の方々との交流から新たな発想や「これならできるかも」といった力が生まれてくることを実感したひとときでした。

参加者より▶▶▶▶

「あつという間の4時間25分」 澤井 純子

「こんなセミナーがあるんですけど 参加しませんか。」という声掛けに、「ぜひ」と言い参加した。

参加者は大学生~70歳代の多種多様な職種とそれぞれ違った環境や価値観を持った人達。講義で課題と保護者からの声を聴いた。驚いた。母は強い、否、親は子供を愛し

ているからこそすべてを受け入れる事ができると強く感じた。

グループワークで多くの人と交流。なんと同郷の人も。立場は違っていても、それぞれの人を認め、愛し、共に生きている人、若者を育てている人、色々な知識を得、成長し社会貢献をしている前向きな人々に出会い、多くの事を感じ考える事ができた。この出会いは今後の私に力を貸してくれると思った。

あの声掛けがなければ、性的マイノリティについて考えることはなかっただろう。それぞれの価値観や生き方を認め合えることが、何も考えずスムーズにできる日がきっと来ると考えた。そのために何が出来るかを考え、行動する力を身に付けていきたい。感謝と充実の4時間25分であった。

「教員を養成する立場から」 井出 智博

(静岡大学教育学部 准教授)

今年の4月に文科省から「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」という通知が学校現場に出されました。私は、教育学部で教員をしているため、学校の先生方を対象にした研修をさせて頂く機会があります。その際、「通知」が出たことを知っているかを尋ねると、ほとんど手が上がりませんでした。「LGBT」という言葉を知っているか、ということを探ねると、ちらほら手が上がり、説明をすると「あー、知ってる」というような反応が返ってきます。どのようにして教員や学生たちにこのテーマを伝えたいだろう、ということに迷いを感じていました。そうした中で受講させて頂いた研修では多くの学びがありましたが、何よりも身近に「当事者」と呼ばれる人がいるのだという意識を持ち、直接話をし、知り合うことが大切だと感じました。特別なことをするというより、当たり前に必要な人が必要としていることに敏感である、ということ伝えていければいいなと思いました。

同時に、私自身、まだまだよく理解できていないことがたくさんある、ということにも気付かされました。貴重な研修の機会を頂き、感謝いたします。ありがとうございました。

「豊作！」 あっきー

いつもながら「性」の奥深さ、その多様性には、大いに驚かされ混乱させられた。多くの人から話を聴いて、ああ～そうだ～と納得すればするほど、新着情報や多様な性を生きる人々、またその周囲の人々の想いや声を聴けば聞くほど、どんどんわからなくなった。この混乱の深さが、自分がまた性について学べたという証拠。自分がいかに無知であるかということを知れた証拠。そしてもっと学ばなければとまた顔を上げる。この学び続けようとする姿勢こそ、多様性を感じられている証拠でもあるように思う。

グループメンバーなど多くの方々との出会い、共感、励まし、新たな情報共有など、疲れるのにエネルギーが充電される。不思議と来た時よりも元気になった。講師の先生方とも繋がれた。6年ぶりに JASE の皆さんにも会えた。あっという間の数時間。豊作の数時間でした。本当にありがとうございました。また次もぜひ参加したい！

「母であり、子どもと接する立場であり、

一人の人間として」 はにちゃん

私は、つい最近の文科省通達の文章でLGBTという言葉を知りました。ふりかえてみるに、ゲイ、レズビアン、性同一性障害という言葉を見たのはテレビです。つまり、テレビで取り上げられている情報しかありません。テレビでは、キャラ的に性をとらえているようで正直、違和感がありました。

セミナーに参加してすぐにテレビで取り上げられている情報だけではないことがわかりました。実際に話を聞いて性同一性障害の人でも多様で、その人らしい性をいきていることに初めて気が付きました。

そこで、ある記憶がよみがえります。

セミナーに参加している途中、思い出していたのは、中学生の同級生のことです。彼女は、いつも「本当は、女じゃなくて男にうまれたかった」と言っていました。スカートを嫌い、スカートの下にジャージを隠しながらはき、少しがに股で歩いていました。

セミナーで、その人らしい性を生きている人を前にして同級生の彼女は、確かに男性に生まれたかったと思います。世間一般に考えられている男性イメージ(体ががっしりとしていて、少し乱暴な言葉使いをして、がに股で歩くなど)にとらわれすぎていたのかもしれないと思いました。無理をしていたんじゃないかと思いました。

もし、中学生の彼女がそのときの思いを話す場があればまた違って、肩を張らずに違った感じになっていたのかもしれない。その頃の私は、言いたい事ははっきりいう責任感の強い彼女がうらやましくそこには、友だちとして、性別は関係ありません。でも、中学生の多感な時期に話す場があればと思いました。

今、私は縁あって子どもたちのそばで仕事をしています。性には、多様性があり、押し付けでなく自分らしくいけることができるように子どもたちに寄り添っていきます。



渡辺大輔氏(埼玉大学)



小林りょう子氏
(LGBTの家族と友人をつなぐ会)



池上千寿子(ふれいす東京理事)

ふれいすトーク Special 「マイナンバー制度と個人情報」

～性別や健康に関する個人情報、障害者控除などの情報はどう扱われるのか？～

11月16日に新宿区戸塚地域センターにて、ふれいすトーク Special 「マイナンバー制度と個人情報」が行われました。来場者は46名でした。(主催：ふれいす東京／共催：LGBT支援法律家ネットワーク有志)

2015年10月からマイナンバー（個人番号）の通知が始まり、2016年1月からは、社会保障、税、災害対策の行政手続でマイナンバーが必要になると報道されています。しかし、個人の視点で、何がどう変わるのか、何が課題なのかなど、実態はあまり見えてきません。

そこで、LGBT支援法律家ネットワーク有志との共催で専門家をお招きして学習会を開催しました。前半1時間は講義をしていただき、後半は参加者からの多数の質問にお答えいただき、会場の理解を深めるときとなりました。司会は、中川重徳弁護士(LGBT支援法律家ネットワーク)と生島の2人でつとめました。(生島)

「マイナンバー制度と個人情報」 中川 重徳

(弁護士／LGBT支援法律家ネットワーク)

11月16日、マイナンバーについての学習会をしました。講師は日本弁護士連合会で個人情報保護の問題に長く取り組んできた清水勉弁護士です。

マイナンバーは、日本国内の市町村に住民登録しているすべての人(外国人も)に割り振られる12桁の番号。既に番号を記載した「通知カード」の配達が始まっており、任意で「個人番号カード」(顔写真付き)の申請ができるとされています。税金や社会保障、災害対策で効率的に情報を管理するための制度とされ、たとえば、会社は、税務署・市区町村に提出する源泉徴収票や健康保険組合あての資格取得届等に、今後は、従業員から提供を受けた個人番号を記載することになります。そのため、会社に告げずに医療機関を受診し後に確定申告をしている人の場合、会社に番号を提供することで、税務署が把握している医療控除の情報が会社に伝わることは無いのかという不安がよく聞かれます。

学習会では、清水弁護士にこれらの質問の一つ一つに丁寧に回答していただきました。まず、会社は従業員に番号の「提供を求めることができ」それを税務署等への提出書類に記載するというだけで、その番号に紐付けされている税務署保有の個人情報を知ることはできません。そもそも、番号の提供は、従業員の義務ではないので法律上は拒むことができ、その場合会社にも罰則はありません。また、番号を提供するためにはカードを提示すれば足りるから、カードのコピーを提出する必要はありません。

清水弁護士によれば、むしろ危険なのは、今後、政府がめざすように、民間サービスを含めマイナンバーの利用が拡大された場合、いろいろな場面でカードが安易に提示されたりコピーされ、番号に応じた個人情報のデータベースが違法に作成され流通してしまうことであるとのこと。国も、源泉徴収票等を本人に渡す場面では番号の記載は不要であるとしており、安易な番号の提供や使用をしないさせないことが重要と思われる。

時宜に適した有益な学習会でした。



左から、司会の生島と中川弁護士、講師の清水弁護士

参加者より▶▶▶

「情報不足からくる不安を解消できました」 ガジ

(40代／男／会社員／服薬歴10年以上)

マイナンバー制度の導入について大きな関心がありました。仕事を切り上げ遅れて会場に着くと、既にたくさんの人がいて、関心の高さを実感しました。

自分の周りでは、数日前に、会社からもマイナンバーの開示依頼が発信されたり、社内でも「今後は銀行口座を開設するにはマイナンバーの開示が必要だ」とか、情報が錯綜していました。そんな中で自分も、金銭流動が考えられるすべての事項には個人情報が紐付けられるだろうという印象を持っていました。一通りの説明の後で、質疑応答の時間があり、たくさんの質問があったのが非常に印象的でした。多くの人が積極的に参加していることを改めて感じました。

自分が一番懸念していたことは、通院・服薬におけるレセプト情報が健康保険組合経由で会社に情報等が伝わってしまう恐れはないのかということでした。例えば、その金額からどのような治療をしているのかを詮索されたりしないか。さらに、身体障害者手帳を取得していることまでわかってしまったら…。会社としても「社員の健康管理の把握」という大義名分があることも理解していますので、仮にそのようなことを聞かれること自体が不安だったのですが、行政分野以外への利用の可能性について、どのように運用されていくのかが、まだ不透明のようで、マイナンバー導入時点で一気に情報が伝達されるわけではない状況だということがわかりました。

自分は今この時点で不安を感じることは時期尚早で、あまり意味がないのではと思えました。そのため、抱いていた懸念は払拭されることとなり、自分にとって大変有意義な時間となりました。

「マイナンバーの理解」 ジャスミン(男／30代)

「マイナンバー制度と個人情報」に参加させて頂き、改めてすぐに身近で活用が頻繁になるということは感じませんでした。お話いただいたことが、真なら国が個人情報をばら撒いているだけにしか感じないと思います。企業側も、

導入に向けてキチンと研修等しないと取扱を雑多にした
り、悪質に使われたりと、色々問題もありそう。今回のお
話では、国民としてのメリットがざらっと流されていたの
で、全て把握した上で判断しないと偏った知識で理解して
しまう、そうも感じました。

今回のマイナンバーは2007年の年金記録問題から導入
にいたったと、噂を耳にしました。それであれば、国や役
所の仕事を国民に押し付けては欲しくないですね。キチン
と導入の説明など、マスコミを頼らず周知してほしいです。
どうも、批判的に話してしまいましたが、個々の理解が重要
な内容であった会だと感じました。

参加してよかったです。演壇、運営された皆様ありがと
うございました。

「知ることのできること」 F (女性/ボランティア)

10月からマイナンバーの番号通知が始まり、連日テレ
ビ番組で組まれる特集から受ける印象(制度を評論しなが

らも最終的に良い面ばかり押し出す)に違和感を覚えつつ、
何も分かってない自分に危機感をもち、今回参加すること
にしました。

講師はマイナンバー制度に反対の立場をとる日本弁護士
連合会の清水弁護士で、終始制度について批評的に教えて
くださいました。そのため、この制度の何を理解し何に注
意しなくてはいけないのかが、自分のなかで違和感なく明
確になったように思います。基本的なことではありますが、
マイナンバーは住民票コードと違い民間でも使うことが法
定された番号で秘密性の保持は難しいこと、個人番号その
ものと個人番号カードをもつことについて(個人番号カー
ドの交付を受けるかは今すぐ決断する必要はない)などを
学べたことで、私が今自分でできる個人情報管理を考える
ことができるようになったと思います。また今後マイナン
バーの民間での利用拡大もあるとのことでしたので、これ
からもアンテナを張っていきたいと思います。貴重な講座
をどうもありがとうございました。

ネスト・プログラム

2015年9月26日に行われた第16回専門家と話そう「クリニックのドクターと話そうⅡ」、10月25日の
第23回カップル交流会「秋のクルーズとランチ」、恒例となった「年末パーティ」、そして「U40ミーティング」、
「異性愛者交流ミーティング」の感想文をお届けします。

専門家と話そう

「クリニックのドクターと話そうⅡ」

9月26日に、元東京大学医科学
研究所教授、品川イーストクリニ
ックの感染症内科でおもにHIV診
療をしている岩本医師をゲストに迎
えた学習会を開催しました。参加
者14名を前に、クリニック開設の
理由や目的、HIV/エイズの治療
の歴史、治療と予防について、世
界情勢や日本の状況などについて詳
細なお話をいただきました。

後半では会場から、完治を含め
た将来の治療の見通し、長期服用による体への影響、高齢
化に伴う他の治療薬との関係、介護業界との連携、保険制
度や障害者認定に関する不安に対してなど、非常に多岐に
渡る質問が出て、ひとつひとつ丁寧に回答いただきました。

長年の診療経験を持つ岩本医師の話には説得力があり、
参加者は興味深く聞き入っていました。クリニックは神奈
川方面や新幹線などからのアクセスが良く、診療の選択肢
のひとつとして機能することが期待されます。(生島)

「医師の貴重なお話」 ぼん(40代/G男性)

2009年に感染を知り早期に投薬開始。その後体調や数
値が安定してくると、この病気そのものに対する関心が自
分の中で徐々に薄れていき、ニュースで新規感染者の報告
数を耳にするなどしても、正直あまりピンときませんでした。



ゲストの岩本愛吉さん
(品川イーストクリニック)

しかしこのプログラムに参加し、海外や日本でのHIVの
現状など、一定のまとまった情報をとてもわかりやすい形
で岩本先生にお話しいただき、陽性者の一人としてさまざま
な視点で関心を持つことも大事なのではないかと思うよう
になりました。またプログラム後半、参加者から寄せられ
た多くの質問に対し、岩本先生は非常に丁寧にコメント
してくださり、先生のお人柄を垣間見ることができたよう
な気がします。

現状、陽性者にとって通院はずっと続くものであり、医
師との信頼関係も重要です。定期検診などにおいて医師と
ゆっくり話す機会はなかなかありませんが、今回のプロ
グラムでは、クリニック開設という新たな挑戦に果敢に取り
組む岩本先生のお姿を拝見し、自分自身とても前向きな気
持ちになり、またじっくりとお話を伺うこともでき、有意
義で貴重な時間をすごすことができました。

「ドクターに感謝」 おさる

(感染告知：10ヶ月/服薬歴：9ヶ月/2回目参加/男性/50代)

今回「クリニックのドクターと話そうⅡ」に参加しまし
た。私は20年程医療現場で検査等をしていましたので、
ドクターの偉大さについては、どちらかと言うと医療側か
らいろいろな先生と接していて、分かっているつもりでは
いましたが、今回より患者側からドクターの姿を見て更な
る感謝です。

品川イーストクリニックの岩本愛吉先生は、既存のクリ
ニック内に新に、HIV患者が受診できる所を設けて頂いて、
一局集中している現状を何とかしなければ、との使命感で
立ち上げたそうです。ただし、全てが大学病院の様にさま
ざまな科が揃っているわけではないようですが、連携病院

として慈恵医大病院にお願いしてるようですので、安心して受診できるかと思いました。これからも、岩本先生の様な先生が出てくる事を期待したいです。

「クリニックのドクターと話そうに参加して」 トラ

(服薬歴：2年目／初回参加／男／30代)

僕は感染を告知され、数年間の経過観察を経て主治医の進言により服薬を始めました。告知を受けた時ひどく落ち込んだり、薬を飲み始める前も副作用や飲み忘れの事を考え、不安になったり悩んだりしました。

医療と情報の発達により、きちんと治療を受けていれば完治できないが、今は告知前となんら変わらない生活を送ることができ、情報がほしい時はインターネットやぶれいす東京のような活動団体から収集ができ相談もさせてもらえます。ありがたい時代になったことを実感しながら日々生活を送っています。

今僕は大学病院で治療を受けていますが、毎回特に病状に変化が見られなければ10分程度で診察は終わり、そして採血して帰宅。病院内は他の患者さんがそれなりにいて順番を待っているし、医者もとにかく限られた時間内に全員を診ていかないといけないプレッシャーが伝わって来ます。当然、自分の病状以外のことで、今回質問した新薬などの開発状況や長期服薬により将来、体への負担は実際どうなの？といった踏込んだ質問がし難い雰囲気にあります。

今回の会は病院の状況とは違って、陽性者と話す場である為、来場された現役でいらっしゃる専門医も参加者と話そう、質問に答えようの姿勢でおられましたので、参加者からのたくさんの質問に1つずつ答えを返し、もちろんこんな病気なので、皆さんそれぞれ病状も違うしすべてに対し明確な回答がない時もありますが、情報共有しやすい場所ではあると感じました。また今後も定期的に参加させていただきたいと思います。

U40ミーティング

10代～30代の男性HIV陽性者(セクシュアリティ問わず)が集まって、さまざまなことを話すU40ミーティング。8月29日の参加者から3名の感想文をお届けします。この回は質問紙とくじ引きを使ったQ&Aコーナーもありました。

「いつの間にか普段の自分を取り戻した」 まーくん

(感染告知年：2014年／服薬歴：1年／参加：5回目／30代)

僕は去年HIVの告知を受けて1人で治療に専念してきました。自分の中でこの事は、誰にも相談せず墓場まで持って行くんだと、心の中でしまい込んでました。病院では、先生や看護師さん、ワーカーさんと病気について話しはしていたんですが、当事者同士ではないので、孤独を感じてました。

今年に入って治療も安定してきて、ふと自分を振り返った時に、1人で病気のことを抱えることは心に良くないと感じて、病院の心理士さんから紹介されていたぶれいす東京に足を運びました。緊張しましたが、あれよあれよとミーティングに何度も参加して、今では初めてぶれいす東

京を訪れた孤独な気持ちは無くなっていました。この病気を受け入れて生きていくことが今では当たり前だと思えたのは、当事者同士で話せる場ができたことが僕にとってすごく良かったんだと思います。

病気について孤独、不安を感じてる方がいるなら、ぜひミーティングに参加することをお勧めします。別に話することがないけどっていう気持ちで行っても、参加者の話を聞くだけでも十分だと思います。

「感染から数ヶ月、見つけた“みちしるべ”」 秋山

(感染告知年2015年／服薬歴1ヶ月／初参加／20代)

初めて参加をさせていただきました。3ヶ月経っての参加でした。感染当初、病院にてこのような集まりがあることも教えて頂いてましたが、陽性者の方と会うということにあまり必要性を感じている部分がありませんでした。自分で病気を受け入れられていなかったためか、焦りや不安というものすら感じてなかったということが大きかったのでしょうか。しかし、数ヶ月経つにつれ、現在の生活や将来についての不安をどう処理すればいいかわからず、少しでも楽になる方法があれば、と今回のミーティングの参加を決めました。

初めてこのような場を経験して、開始前から最中もガチガチに緊張してしまいましたが、参加者皆様のお話を聞くだけでスッと漠然とした不安のモヤが取れたような気持ちになれました。周りに感染をカミングアウトしている人が居ても、「一人で向き合っている」という意識が強かったのですが、今回同じ境遇の方と出会って単純に「話したいことを話せることが嬉しい」と思いました。

同じ陽性者でもいろいろな人がいる、そして様々な人の話を聞くことは今後の陽性者としての自分、そして“陰性者”として普段、生活をする自分の指針にもなると感じました。

「病気と上手に付き合っていく為に」 シロ

(服薬歴：9ヶ月／年齢：30代)

今年の春ごろから数回参加させて貰っています。U40ミーティングは自分の意見を話したり、色々な方の様々な考え方や体験を聞いて、病気と付き合っていく心構えを整えさせてくれます。

参加する前は周囲に病気の事を話せる人もおらず、病気をもったままどうやって生きるかを、一人でグルグルと考えていました。しかし、ミーティングに参加するようになって、自分の思っていることを人に話すことにより、頭の中が整理され、自分の考えが明確になってきました。また、告知を受けたばかりの人の話を聞いて初心を思い出したり、自分より病気に関して先輩な方の体験を聞いて先々のことを想像することで、病気と付き合っていくことが徐々に自分の腹に落とし込めてきている気がします。

今回は特殊な回で、無記名で参加者が質問項目を記入し、ランダムにくじ引き方式でみんなが質問に答える形式だったので、日頃聞きづらいアンナコトやコンナコトが聞け、とても楽しかったです。

回数を重ねることで、ミーティング以外のところで相談できる仲間もでき、参加する前とは考え方や環境が随分と変わり、参加して良かったなと思っています。

異性愛者のための交流ミーティング

HIV陽性者の中では少数派の異性愛者が、性別・年齢を問わずに交流できるミーティング。進行は同じ立場の2名のピア・ファシリテーターが担当して行い、毎回さまざまな話題が取り上げられ活発な意見交換が行われています。参加者から2名の感想文をお届けします。

「新たな一歩」 トミー (感染告知：2015年6月/初参加)

主治医の先生にぶれいす東京の存在を感染告知の当日に教えて頂いていましたが、日程的な問題とやはり第三者へのカミングアウトに対しての不安を抱えていました。ポジティブ組になった事を誰にも伝えておらず、このままでも良いかな…とも感じていましたが、早々に投薬も始まり、幸いなことに副作用もなく徐々に周りを気にする余裕が少し出てきました。

今回、参加していたメンバーの中で初参加は自分ひとり。緊張感と不安感で一杯でしたが、進行役のスタッフの方々、参加されている先輩の方々、誰もが経験したであろう同じ心境を真剣に聞いてくれました。様々な世代の方からひとつのテーマに沿って経験談を生声で聞いた事、そして参加されている方々がみんなフツーな事!!

このフツーな空気感が凄く嬉しくて、不安が安心感に変わり、自然と涙が溢れてしまいました。告知後から今まで抑えていた信じたくない、変に平常心を保たなければという感情が溶けていくような感覚で、「まずは自分に対してカミングアウトをしてみる」という意味深い言葉を頂き、自分との向き合い方を変えるきっかけとなりました。交流ミーティングをセッティングして下さったスタッフの皆様、参加されているメンバーの方々のマナーが保たれているからこそ、継続して開催されているのだと感じ、ここに参加出来た事を本当に感謝しています。

「考えが広がり、悩みが減りました」 とも

(感染告知年：2002年/服薬歴：3ヶ月/男/異性好き/30代)

そもそも、ぶれいす東京の利用登録をした理由が、異性愛ミーティングの存在をたまたま知ったからでした。感染してから12年間、医療機関からの情報だけで、感染者との交流を持たずにきました。このころ、今後の人生を考えなければいけない状況と、病気との付き合い方に悩んでいた自分にとって、大変興味のある集まりでした。

実際に参加して、自分の悩みを話してみると、男女両方から、いろんな意見を聞くことができました。他のミーティングにも共通するのですが、グランドルールがあるおかげで、意見を言いやすい、聞きやすい環境が整っているからか、居心地もよかったです。同じ病気を持っていても、それぞれ生活や環境が違っていると、病気への対応が違ってしまうということも強く感じました。

何回かミーティングに参加し、自分以外の考えや、個々の経験を知ることにより、以前に比べ、前向きかつ余裕をもった対応ができるようになりました。ここが重要なのですが、男性側、女性側、それぞれ複数の意見をその場で聞くことができる機会は、そうないかと思えます。

参加するたびに、新たな発見があるこのミーティングはずっと続いてほしいです。

第23回 カップル交流会 「秋のクルーズとランチ」

10月25日に行われた第23回のカップル交流会は、川下りのクルーズを楽しんでからホテルでランチをするという趣向で行われました。8組16名の参加者の中から3名の感想文をお届けします。

「久々のデート気分な1日」 けんじ(♂ゲイ/++/♂♂)

自分もパートナーも陽性ということもあり、普段は二人の中で完結していた日々でしたが、カップル交流会ということで思い切って参加を決めました。

秋晴れの爽やかな日で、参加されてたカップルの方々と話をする事ができ、同じようなことで喧嘩していたりと共感できることも多々あり、また、服薬についての悩みも相談できたりしました。

今回参加したことで改めて自分たちがカップルなんだという認識も生まれ、帰り道もいつになく二人の会話も弾み、出会った頃の新鮮に戻れた1日となりました。このようなイベントに参加させて頂きありがとうございました。

「いつもと違った解放感」 ハルピン餃子

(4回目/男性/ゲイ/40代/陰性パートナー/♂♂)

風がとても冷たかったけど、船での川下りにはもってこいの晴天で、とても気持ちよかったです。しかし、まさか10月の末に日焼けするとは想像していなかった！夕方、気がついてみたら、酔っぱらったみたいに顔が真っ赤でした。おかげで一週間後、顔が悲惨なことになりました…。

昼食の後、解散。もう二組のカップルといっしょに公園の中を散策しました。観覧車に乗ってみました。前後の乗りカゴ同士でケータイで写真の撮りっこ。後で交換しました。天気が良くて、見晴らしも良かったけど、風が強い日だったので、かなり揺れました。これがなかなかスリリングで面白かった！もう一周乗っても良かったな。

カップル交流会でしか会わない人たちに久しぶりに会えて、うれしかったです。「この間、とうとう結婚した」とか、「以前の相手とは別れて、今日は新しい人と一緒に来た」とか、みんなそれぞれ。でも、みんなそれぞれに元気そうです。

屋内でのミーティングの方が話はしやすいのだけど、みんなで屋外へでかけるのは、違った開放感が味わえて良いです。次回も楽しみです。

「初参加、初世話人！」 コウ

(初参加/男性/ゲイ/陰性パートナー(+、♂♂))

今回初参加。更に、初世話人！！ひゃ、プレッシャー。「カップル交流会」の意味も、理解しきれないうちに、あれよあれよと、計画は進行していきました。同じ悩みや痛みを持った人たちと交流することで、自分たちの関係を再認識できる機会になればと思い企画しました。

当日は、秋晴れ。真っ青に抜けた空の下、船のデッキで、ワイワイガヤガヤ。心地よい川風や、青い空が僕たちの心も解放してくれたみたい。今日初めて会った人たちなのに、まるで、旧知の友達みたいにおしゃべりに花が咲きました。

病気を抱えながらもまるで普通のカップルのようににこやかに話す彼ら。信頼するパートナーがいるからこそ乗り

越えることが出来たんだろうな。そう思うとあったかい気持ちになりました。

下船した後の食事会も、ワイワイ盛り上がり。アルコールはグラス一杯だけだったのに(笑)やさしい木漏れ日の下、公園内を散策。気がつけば、すっかり日が暮れて、とても幸せな一日でした。

皆さんと交流会に参加して、辛いのは自分たちだけじゃない、って、思いました。今回参加出来なかった方々も、同じ仲間とふれあうことで、ちょっと気持ちに変化がうまれるかもしれません。是非、次回はご一緒しましょう。

年末パーティ

2015年の年末パーティは、12月13日に会場を借りて行われ、参加者、スタッフなど合わせて57名の大盛況となりました。参加者4名の感想文をお届けします。

【初めての体験】 サリー (女性/40代)

私はこのふれいす東京のプログラムに参加したのは、2回目の新参加者です。この病気を知ったのは、2か月位前…。パートナーのいきなりエイズからでした。この2か月の間、もの凄く長く感じます。いろんなことがバタバタ起きて、精神的に参っていたところ、病院でこちらを紹介されました。内服治療は、諸々の書類が揃ってから開始予定となっています。

以前参加したのは、異性愛者の会でした。泣いてばかりの2時間で、他の方々には、迷惑をかけてしまったかもしれません。けど私には、心を落ち着かせてくれる時間になりました。このような場がある事に感謝しました。私だけじゃ無いんだ……。みんな同じ経験をされて来たから、みんなわかってくれる。嬉しかったです。

今回は、いろんな方がいらっしゃる、年末パーティ。ちょっと楽しみにして来ました。ホントにいろんな方いらっしゃいました。女性は4名ほど。異性愛の男性も数人…。こんなにも男性が居ても、全く見向きもされないのは、初めての体験でした。逆に女性の数が少なくても、何も気にならない空間でもありました。不思議な体験です。性別やセクシュアリティは違って、共通の話題がある。みんな頑張って生きて行こう。

今回の会では笑って過ごせ、また元気を貰えました。いつも穏やかな口調と笑顔で対応して下さる、スタッフの皆さん、生島さん、ありがとうございます。来年も沢山プログラムに参加して、元気を取り戻したいと思っています！！

【忘れる、忘れない】 オヤジ(50代/男性/服薬歴15年)

感染者は、ボジであるという事実を忘れてはいけないが、それと同時に、つかの間忘れないとハードな実社会で闘えないというジレンマを抱えている。いつも感染のことで思い悩んでいては、仕事ができないからだ。

今回、5年ぶりでイベントに参加させていただいた。しばらくぶりのオヤジの再来でも、懐かしがってくださるスタッフの方々の笑顔が心にしみる。

パーティがたけなわを過ぎた頃、ネスト・プログラムの様々なミーティングの紹介があった。なんと、ミーティングの多様さよ。この流れは、色々な理由によるのだろう。

しかし、大きな流れとしては、「死」から遠ざかったことによって、余裕が生まれ、感染者に対応するイベントが多様性を帯びたのではないかと勝手に想像する。

15年前は、亡くなっていった近親者たちの思い出が記憶に生々しく残っていたり、自分自身が生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされていたり、飲みにくく回数が多い薬の服用や強い副作用に悩まされたりで、概ね医学上の問題で、感染者もスタッフ陣も右往左往していたように思う。

……そんな時代が去って、現在では、ある職種に限定されたミーティングや恋人同士の会が催されていたりもする。それは、結構なことだ。しかし、あの時代を生き抜いたオヤジとしては、たまにイベントに参加させていただくことで、「楽しみ」と同時に、日々実社会に没入している自分を、感染という現実呼び戻すための、「戒め」ともしている。

【少し気持ちが楽になった】 さとし(30代/男性)

陽性だと分かって、1か月くらいで、誰にも悩みを相談できなく、落ち込んで過ごす日々が続いていました。誰かに話しをしたい、相談してみたいと思い、会員になりました。会員になって、すぐ参加できるイベントが年末パーティだったので、少し不安な気持ちもありましたが行ってみました。

ほかのプログラムにも参加したことがなかったので、どんな風に話をふればよいのか？どの程度まで質問してもいいのか？最初、戸惑っていました。

他の参加者は、誰も自分のように深刻で暗い顔して、ふさぎ込んでいる人はいなく、フレンドリーで、自分からも徐々に話せるようになりました。

他の参加者の方に、自分のネガティブな話を聞いてもらったら、「最初はそうだよね～。しばらくして体調落ち着いたら、楽に過ごせるよ」と言われ、少し気持ちが楽になり、それだけでも年末パーティに参加した甲斐があったと思います。これから他のプログラムにも参加してみようと思います。

【初手伝いと初参加】 ラインデリア

(男性/ゲイ/30代/感染告知2005年/服薬歴11年)

ネスト・プログラムの年末パーティに参加すること、そのお手伝いとして活動することを今回、同時に初体験しました。無理なく自分にできることで役に立てれば～と思っていましたが、参加者自身で会話の輪が出来たり和やかな空気を作られていたので、安心しました。

一人一人の自己紹介が終わると一気に親近感が湧き、参加者の歌で盛り上がりクライマックスになりました。用意された軽食と飲み物で腹も満たされ、また和んだ雰囲気でも心も満たされて充実した時間が過ごせました。個人的には最後のケーキにテンションMAXになり、参加してよかった！と思ってしまいました(笑)。次のパーティではスタッフからの出し物に期待して、さらに盛り上がりたいたいと思いました。



2匹のトナカイも年忘れ！

部門報告 (2015年10~12月)



ホットライン

HIV/エイズ電話相談(ぶれいす東京および東京都委託)

ホットライン部門・活動状況()内は出席人数

- スタッフミーティング 10月(研修のため中止)
11/15(6名) 12/20(8名)
- 世話人会 10月(研修のため中止) 11/15(5名) 12/20(5名)
- 東京都電話相談連絡会 10/9(3名) 11/13(3名)
- 東京都ボランティア講習会 10/30(10名)
- 新人研修修了ミーティング 12/25(4名)

相談実績報告

ぶれいす東京エイズ電話相談

	10月	11月	12月
日数(日)	4	5	4
総時間(時間)	16	20	16
相談員数(延べ)	4	5	4
相談件数(件)	33	47	37
うち(男性)	29	39	30
(女性)	4	8	7
(不明)	0	0	0
陽性者相談	1	1	0
要確認相談	0	1	0
1日平均(件)	8.3	9.4	9.3

東京都夜間・休日エイズ電話相談(委託)

	10月	11月	12月
日数(日)	14	13	12
総時間(時間)	42	39	36
相談員数(延べ)	29	27	24
相談件数(件)	176	165	125
うち(男性)	132	119	97
(女性)	41	45	28
(不明)	3	1	0
陽性者相談	1	2	1
要確認相談	0	3	0
1日平均(件)	12.6	12.7	10.4

シフトの人員を集めるのに、シフト担当が苦戦を強いられています。長期休みのスタッフが増え、一部のスタッフに相当な負担がかかっている状態です。新人研修を同時進行していることが、その状態に拍車をかけています。研修を修了したスタッフが出てきているので、年明けには危機的状況を少し抜け出しそうです。

(報告:佐藤)



ボディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

ボディ担当者ミーティング [10-12月実績]

- 10/1…中止 10/15…7名 11/7…2名
11/19…5名 12/3…中止 12/17…5名
※個別ミーティング3件

利用者数

12カ所の医療機関に通院/入院中の19名の方に23名のボディスタッフを派遣

活動内容(2015年12月末現在)

- 派遣継続中17件
- 在宅訪問16件
- 病室訪問1件
- 派遣休止5件

10月~12月中の動き

- 新規派遣・相談1件
- 派遣終了2件
- 派遣調整16件

今後のミーティング日程

午前ミーティング:

偶数月第1木曜 11:00/奇数月第1土曜 11:00
2/4(木)、3/5(土)、4/7(木)

※木曜は参加者がある場合のみ開催。事前にご連絡下さい。

午後ミーティング:

毎月第3木曜 19:00

2/18(木)、3/17(木)、4/21(木)

ボディの現場から

2名の方が亡くなられて派遣が終了しました。1件は定期的な会話での訪問、1件は買物代行や外出介助で利用されていた方でした。両ケースともHIV以外が原因の急な体調変化によるものでした。新規派遣は、自宅の整理等での依頼がありましたが、本人の体調不良により延期になっています。11月8日(日)にボディ・ワークショップを開催し13名が参加、修了し登録を行いました。研修には1名のボディ利用者にもご協力いただきました。

(報告:牧原)



ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのプログラム

ネスト・プログラム参加状況(2015年10-12月)

グループ・ミーティング

- 新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)第81期
(参加者4名)
10/14 10/28 11/11修了
- 新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)第82期
(参加者6名)
12/19
- ミドル・ミーティング
10/10(17名) 11/14(17名) 12/12(13名)
- 異性愛者のための交流ミーティング
10/16(8名,ピア・ファシリテーター1名)
11/27(11名,1名)
12/26(9名,1名)
- Women's Salon
10/12(4名)
- 陰性パートナー・ミーティング
10/3(7名,ピア・ファシリテーター1名)
12/5(6名)
- もめんの会(HIV/AIDSを支える母親の会)
12/2(3名)
- カップル交流会「秋のクルーズとランチ」
10/25(8組16名うち幹事1組2名)

学習会／セミナー／ワークショップ

- ・ストレス・マネジメント講座第25期
10/20 (2名) 11/17 (2名) 12/8 (5名)
- ・ベーシック講座「知ってこ！社会福祉制度」
11/18 (2名)

交流会

- ・就職活動サポートミーティング
10/17 (8名) 11/18 (6名) 12/19 (2名)
- ・介護職として働く陽性者のミーティング
10/19 (10名) 12/14 (7名)
- ・看護師として働く陽性者のミーティング
11/21 (7名)

年末パーティー

- ・年末パーティー 12/13 (48名)

ミーティング(陽性者メンバー、ぶれいす東京スタッフほか)

- ・新陽性者PGMファシリテーター・ミーティング
第81期振り返り 11/20 (4名、4名)

ピア・ファシリテーターによるプログラム等 (厚生労働省委託事業)

- ・U40 (アンダー・フォーティ)ミーティング
～10代から30代の男性HIV陽性者のミーティング～
10/31 (参加者12名、ピア・ファシリテーター2名)
11/25 (6名、2名) 12/22 (7名、2名)
- ・ミックス・トーク10 (MT10)
12/12 (参加者3名、ピア・ファシリテーター2名)
- ・障害者枠で働く陽性者の交流会 10/18 (4名)
- ・教師として働く陽性者の交流会 11/21 (5名)
- ・ネスト・プログラム スタッフ研修
11/3 (参加者12名、ピア・ファシリテーター2名、講師2名)
- ・セクレタリー (26回 26名)
- ・ピア・ファシリテーター (14回 28名)

NEST NEWS LETTER

10/1:10月号発行 11/5:11月号発行 12/4:12月号発行

新たな試みとして、気軽に参加できる「カップル交流会カジュアル」を1月に開催する予定です。詳しくはWebサイトをご覧ください。<http://www.ptokyo.org/nest/couples>

(報告：佐藤、加藤、はらだ)

Gay Friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動 <http://gf.ptokyo.org/>

Gay Friends for AIDS 電話相談

10月 18件(1日平均3.6件)
11月 10件(1日平均2.5件)
12月 10件(1日平均2.5件)

聴覚障がい者向けのメール相談対応

10月 0件 11月 0件 12月 0件

Tokyo AIDS Weeksにスタッフ参加

11月28日・29日に国立国際医療センターで開催された「Tokyo AIDS Weeks」のメインとなる2日間のイベント、Gフレからは5名のメンバーが黒のスタッフTシャツで会場係として参加しました。中にはコーラス隊に加わったメンバーも。病院内ということで、入院中の方が見にこられたりするなど、一般的なイベント会場ではほとんどない状況もありましたが、

大きなトラブルなくイベントを乗り切ることができました。また自分たちにとっても勉強になることがたくさんあり、本当に有意義なイベントだったと実感しています。ご来場くださった皆様ありがとうございました。

イベントの様子は5～6ページをご覧ください。

(報告：sakura)



HIV陽性者への相談サービス

相談実績 2015年10月～12月

2015年	10月	11月	12月
電話による相談	98	104	67
対面による相談	66	43	70
E-mailによる相談等	67	96	110
うち新規相談	19	24	22

※メール新規は含まず

10～12月新規相談者の属性(N=65)

陽性者： 38人(男性：34 女性：4)
パートナー： 15人(男性：11 女性：4)
家族： 4人(男性：0 女性：4)
専門家： 1人(男性：0 女性：1)
判定保留： 5人(男性：3 女性：2)
その他： 2人(男性：2 女性：0)

10～12月新規相談者の情報源(N=65 複数回答)

WEB(PC/携帯サイト含)： 34件
人的ネットワーク(家族、本人、パートナー他)： 10件
医療関係(Dr.、Ns.、MSW、クリニック他)： 6件
冊子/パンフ： 5件
電話相談： 4件
以前から知っていた： 2件
他の陽性者： 2件
コミュニティセンター： 1件
地方検察庁： 1件
不明： 2件

10～12月新規相談の内容(複数回答)

【ぶれいす東京のサービス利用、積極的参加等】〔関東〕

- ・利用登録×17(複数選択)
新陽性者PGM×5、カップル交流会×4、U40×3、
介護職×2、看護師×1、異性愛×1、陰パ×1、
年末パーティ×1
- ・他の陽性者と会ってみたい

【検査や告知に関する相談】〔関東、北海道/東北〕

- ・郵送検査で陽性が判明
- ・(判定保留)スクリーニング陽性、確認検査前に即日検査を受けてみる意味はあるか
- ・(判定保留)妊婦健診で陽性の可能性があるといわれて混乱
- ・(判定保留)スクリーニング陽性で頭が真っ白、確認検査を保険適応でしたい
- ・(判定保留)保健所の即日検査で陽性、仕事の継続不安
- ・(判定保留)健康診断のオプションの検査で陽性、混乱している

【告知直後の漠然とした不安】〔関東、近畿〕

- ・告知直後の不安や混乱×3
- ・混乱して精神的におかしくなって、ようやく落ち着いてきた
- ・周囲に受け入れられるのか不安
- ・受診前の医療機関の選択

【対人関係に関する相談】〔関東、北海道/東北、東海、中国/四国〕

- パートナーの検査結果待ちの不安や混乱
- 自分と性行為があつてからパートナーが風邪気味、オーラル行為での不安
- 安全にセックスができなかった罪悪感
- 好きになった人に伝えたら、気に入らない態度をとられた
- 予防なしのセックスについて

【生活に関する相談】〔関東〕

- 生命保険の新規加入、契約更新×2
- 障害者手帳の取得
- 手帳の等級の他者との差異
- カードローンの債務整理
- 国民健康保険から社会保険へ切り替える際のプライバシー不安
- 生活保護の受給、残薬が少ない

【就労に関する相談】〔関東、東海〕

- 就職活動中、今後の働き方
- 障害者枠で医療従事者として就労を検討中

【医療体制や受診に関する相談】〔関東、北海道/東北、東海〕

- 土日診療が可能な医療機関への転院
- 未通知で一般医療機関を受診、手術の前日に延期の連絡があり混乱
- cd4があがらない不安
- かかりつけ医の診断への不信、今後の医療機関の選択
- 健診で禁飲食の際の服薬について
- 他陽性者との服薬のタイミングの違い
- 救急外来の当直医の対応への不満や怒り
- 他科診療での、近医と拠点病院の診断の違いによる混乱
- クリニックと大学病院の医療体制の違い

【心理や精神に関する問題】〔関東〕

- 精神科の通院を中断中
- 注意欠陥障害について
- 薬物問題

【周囲の人からの相談】

〔関東、北海道/東北、東海、近畿、中国/四国〕

<パートナー/配偶者/元パートナー>

- (パートナー)通知を受けてから初めてのsexでの不安×2
- (パートナー)付き合い上で注意することはあるか
- (パートナー)外国人パートナーの日本留学時のビザ、医療、医療費
- (パートナー)通知を受けたが付き合い続けたい
- (パートナー)sexや接触到に不安あり、sexができない罪悪感
- (パートナー)頭ではわかっているけど冷静に判断できない
- (パートナー)パートナーの薬物使用の不安
- (配偶者)通知を受けての混乱、誰にも話せないつらさ
- (配偶者)浮気やDVのある旦那との関係性、sexでの感染不安
- (元配偶者)離婚後も同居の元夫との関係性、経済的な問題

<家族(親、兄弟) / 親戚>

- (母親)うつやアルコールの問題がある子供の支援
- (母親)離婚や薬物など色々問題がある子供が心配
- (母親)制度のことを知りたい、今後は不安
- (母親)地方在住で高次脳障害もある子供の福祉サービス利用

<その他>

- (友人)キスした相手から通知あり、だ液は大丈夫か
- (確認検査待ちの夫)不妊治療の即日検査で妻が陽性、結果の信憑性

<専門家>

- (地方検察官)療育手帳のある方の出所後の生活支援

(報告: 牧原、生島、福原)



研究・研修部門

研究事業

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業「地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究」(研究代表者: 樽井正義)

- 11月29日: 研究成果発表会「HIV陽性者とメンタルヘルス～薬物使用は生き辛さの現れか?」(主催: 公益財団法人エイズ予防財団)を実施。参加者154名。詳しくは、4ページの記事をご覧ください。
- 11月29日: 前研究班の研究成果を反映させ改訂したパンフレット「職場とHIV/エイズ—HIV治療のこの10年の変化(2003→2013)—」を発行、「地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト」(<http://www.chiiki-shien.jp/>)で公開。
- 生島分担研究の、MSMの薬物使用・不使用に関わる要因を探る「LOVE & SEX調査」のパイロット調査として、バーやハッテン場、SNSなどを利用するMSM14名にインタビューを実施。



厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「効果的な献血推進および献血教育方針に関する研究」(研究代表者: 白阪琢磨)

- 研究分担者として生島が「ハイリスク層の献血に関する意識・行動調査」を実施。

※上記2研究課題に対し、11月13日にぶれいす東京研究倫理委員会を開催。

その他研究協力

- 「UNAIDSが掲げる臨床評価指標90-90-90達成のための男性同性愛者に対する新しいHIV検査システムの構築に関する研究」(主任研究者: 岡慎一)への研究協力として、毎週木曜日19~22時(および11月15日(日)14~22時)に、検査キット「HIVcheck」配布場所のaktaに相談員を派遣。

学会発表(第29回日本エイズ学会学術集会・総会)

- 薬物使用経験のあるHIV陽性MSMの心理社会的要因-生態モデルによる分析から-(野坂祐子)
- NPOによる対面相談のニーズとその対応に関する考察(生島嗣)
- HIV陽性者のためのピア・ミーティングの運営と当事者の運営参加に関する考察(佐藤郁夫)
- HIV陽性者と周囲の人への相談事業における新規HIV陽性相談者の背景について(牧原信也)

研修事業

東京性教育研修セミナー

- 11月3日：「学校でのLGBTへの新たなとりくみ?～文部科学省通達をうけて当事者と考える」(協賛：日本性教育協会)を開催。参加者24名。詳しくは、6～7ページの記事をご覧ください。

職場研修

(東京障害者職業センター「雇用管理サポート事業」など)

- 12月14日：東京障害者職業センター雇用管理サポート講習会「免疫機能障害の基礎知識と雇用管理」にて講演。参加者24名。
- 12月25日：企業にて講演。参加者16名。

受託研修協力

- 11月4日：「東南アジア青年の船」ディスカッションプログラム「Health Education (Measures against HIV/AIDS)」(主催：青少年国際交流推進センター)に運営協力。参加者33名。
- 11月15日：青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修(主催：シェア＝国際保健協力市民の会)に運営協力。参加者3名。

その他講師派遣・研修など

- 10月3日：第5回AIDS文化フォーラムin京都にて講演。参加者120名。
- 10月9日：埼玉県研修会にて講演。参加者21名。
- 10月24日～25日：中四国MSW研修会にて講演。参加者42名。
- 11月6日：千葉県保健所研修にて講演。参加者14名。
- 12月3日：東京都エイズ予防月間講演会「働く世代に多いHIV/エイズ～誰もが働きやすい職場とは～」にて講演。参加者90名。
- 12月9日：Pharma Delegatesにて講演。参加者109名。
- 12月11日：トークセッション「We ARE Here 日本でHIV/エイズ支援に関わる、ということ」にて講演。参加者20名。
- 12月14日：東京女子大学にて講義。参加者140名。
- 12月18日：aktaデリヘル研修会にて講演。参加者10名。

(報告：生島、牧原、大槻)

認定NPO計画に是非ご協力ください 2016年3月末までにサポーターを200人募集しています！

ぶれいす東京は、HIV/エイズとともに生きるひとたちがありのままに生きられる環境を創り出すことを目指して活動をしています。財政的にも安定した運営を継続していくために、認定NPO法人になることを目指しています。そのために、2014年度/2015年度のサポーター合計数が200名必要です。ぜひご協力ください。

認定NPO法人になると、寄付者が寄付額に応じた税額控除を受けられるなど、これまでにはない優遇を受けられるようになります。

認定NPO計画のサポーターになるには

寄付などをする(①～③のいずれか)

- ① 年間3,000円以上の寄付をする
- ② 毎月1,000円以上のクレジット寄付をする
- ③ 賛助会員(年会費個人10,000円、団体20,000円)になる



非公開の寄付者リストへ氏名・住所の掲載

- 東京都にリストを提出しますが、閲覧・公開はされません
- 団体の場合は、名称と事務所の所在地を記載
- 生計を一にする世帯は、何人が寄付をしても一人とカウント

<http://www.ptokyo.org/support/donation>

手続きの仕方

【郵便振替の場合】

寄付、賛助会費お振込の際に、認定NPO計画のサポーターになることを明記してください。
ゆうちょ銀行：郵便振替口座
No.00160-3-574075
特定非営利活動法人ぶれいす東京

【銀行振込の場合】

office@ptokyo.org にメールしてください。
件名：「認定NPOサポーター希望」
本文：1)振込情報(振込日/振込名/金額)
2)寄付者情報(名前/住所)
三井住友銀行 高田馬場支店
普通 2041174
特定非営利活動法人ぶれいす東京

【クレジットカード決済の場合】

備考欄に「認定NPO計画サポーター希望」と明記して、名前、住所をご入力ください。ぶれいす東京 Web サイトからお手続きください。

【すでに賛助会員や寄付者になっている方】

2015年度に会員や寄付をいただいている方で認定NPO計画のサポーターになっていただける場合は、事務局までご一報ください。



編集後記

▶▶▶時々、富士山が眺望できる山に登っているけど、熊に間違えられて猟師に撃たれないか不安だ。(まの) ▶▶▶花があっても、無くても、ぶれいす東京のお花見の宴には、多様な人たちが集い、あちらこちらで話に花が咲きます。今年は3月26日(土)午後1時に開催予定で、雨天の場合は27日に延期する。詳細はWebで。ぜひ、お目にかかりましょう。(いくしま) ▶▶▶暖冬、寒波、そして春一番。季節のうつろいというにはあまりに激しい変化に体がビックリしています。次はスギ花粉……。どうぞ今シーズンはお手やわらかに。(やじま)

編集・発行 特定非営利活動法人 ぶれいす東京

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-11-5 三幸ハイツ403
TEL. 03-3361-8964 (月～土 12～19時 ※祝祭日を除く)
FAX. 03-3361-8835
E-mail office@ptokyo.org
ぶれいす東京 <http://www.ptokyo.org/>
Gay Friends for AIDS <http://gf.ptokyo.org/>
Twitter @placetokyo (<http://twitter.com/placetokyo>)
Facebook <http://www.facebook.com/PLACETOKYO>